

赤れんが通信



2021年10月13日(水)から10月15日(金)まで、北海道庁国際課の国際交流員たちが「赤れんが通信」の取材のために北海道の縄文遺跡群などを訪問しました。その活動について金昭賢(キム・ソヒョン)国際交流員のレポートをご紹介します。

北海道の縄文遺跡

縄文は日本語で「縄の文様」を意味しており、その時代に製作された土器に縄文が刻まれたことから由来した名称です。縄文遺跡は日本全国にわたって分布されていますが、そのうち「北海道・北東北の縄文遺跡群」が今年7月27日、世界文化遺産に登録されました。縄文時代は、時代区分上の中石器～新石器時代に該当し、紀元前13,000年から紀元前400年まで、約12,000年以上続いたと言われます。

縄文遺跡の保存状態が良い理由は？

北海道の地層を分析してみると、過去に火山が噴火した痕跡が現れており、樽前火山、有珠火山、駒ヶ岳火山などの噴火が代表的です。その影響で厚く堆積した火山灰層の緩衝作用により、縄文遺跡を保護することができました。地層では縄文人たちが使用した様々な道具をはじめ、貝殻、動物の骨なども発掘され、縄文人の食糧事情もうかがえます。



▲高砂貝塚(洞爺湖町)

縄文人の住居環境

村を形成し、共同生活をしていた縄文人には、安定的な生活ができる「立地条件」が非常に重要だったと考えられます。今回見学に行ってきた縄文遺跡のほとんどは、海を見下ろせる丘の上に位置していました。

海と川など、水資源が豊かな地域に村を作る傾向がある縄文遺跡の特徴が、千歳地域の縄文遺跡では見られない理由が気になりましたが、「今は埋め立てられて痕跡がないが、かつては千歳地域のキウス遺跡が形成された地域の近くに沼が存在し、また新千歳空港の近くからは貝塚も発見されることから、千歳地域の縄文人たちも川や海の影響を受ける生活をしていたと考えられる」という説明を聞くことができました。



▲海が見える大船遺跡(函館市)



▲入江貝塚の竪穴住居跡(洞爺湖町)

縄文人の生活と食糧

発掘された遺跡を通じて、縄文人は自然から得た材料で道具を作り、海と森で食糧を採取して生活していたことがわかります。

入江・高砂貝塚が位置する洞爺湖町には、現在も夏になるとイルカがやってきますが、縄文時代にもイルカを食糧にしていた痕跡が見られることが興味深かったです。また、柄と銚先が分離する銚を使って漁労を行っていた事実から、縄文人たちの知恵もうかがえます。

一方、比較的気候が暖かった本州では、栗やどんぐりなどを主食としていたため、縄文人たちに虫歯が多かったのですが、北海道に居住した縄文人たちは狩猟と漁労で捕った動物や魚を主に食べていたので、虫歯があまりなかったと言われます。

縄文時代の流れと各時期の遺跡



縄文人の交流

北海道の縄文遺跡では、当時の縄文人たちが本州と活発な交流をしていたと推定される遺物が見つかりました。新潟産の翡翠で作られた装飾品、秋田産のアスファルトなど、本州の様々な地域で採取される資源だけでなく、当時の北海道には生息していなかった猪の牙で作られた装飾品などが発掘されたこともあります。

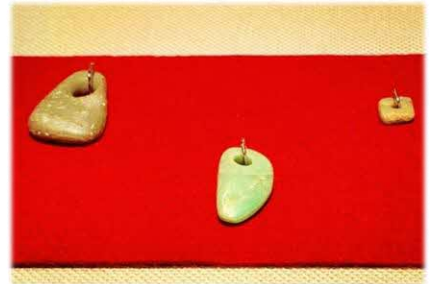
しかも、北海道の縄文人には抜歯の風習がなかったことが知られていますが、高砂貝塚で発掘された人骨の中には、前歯が抜歯された痕跡が見られることから、本州から移住してきた人々もいたと推定されます。

そのことから、当ても両地域の間には様々なモノや動物が行き来しただけでなく、移住して定着する縄文人もいたことがわかります。

一方、千歳地域の縄文遺跡で興味深かったところは、当ても活発な交易が可能だった地理的特徴です。縄文人たちは支笏湖から千歳川へ、また海へと流れる水を利用して、木船に乗って交流をしていたと見られます。現在、千歳には北海道の玄関である「新千歳空港」がありますが、縄文時代にもこの地域が交流の要衝だったということが面白いです。



▲猪の象牙で作った装飾品（入江貝塚）



▲翡翠装飾品（垣ノ島遺跡）

縄文人の家と風習

縄文時代の人たちは、竪穴住居で生活をしました。深くて大きな穴を掘った後、木で柱を立て、樹皮を覆って竪穴住居を建てました。大船遺跡などでは縄文人たちが竪穴住居を作った跡が保存されており、伊達市に位置する北黄金貝塚公園でも復元された竪穴住居の様子を見ることができます。床には、炉とともに儀式に使われたと思われる平らな石（神棚）が置かれており、胎盤を埋めた場所と推定される穴も存在します。日本では、現在も胎盤を埋める場合があると言われるので、おそらく縄文時代から存在していた風習が長い間続いていると考えられます。



▲復元された竪穴住居
（北小金貝塚公園）



▲大船遺跡の竪穴住居跡
（周りの穴は柱を立てた位置）



▲キウス周堤墓群
（1号周堤墓）

縄文人の村にはお墓もあります。特に、貝塚や盛土(村の内で土を高く積んだ場所)には、縄文人の食べ終わった貝殻や動物の骨をはじめ、土器や道具などの破片、人の骨までも出土されることから、ここは使い果たした道具及び命を落とした動物や死者の鬼などをあの世に送る儀式を行うための場所だったと思われる。これは、「クマなどを殺した後、その動物に宿っていた魂をあの世に送る儀式を行ったアイヌ民族の風俗に受け継がれたと見られる」という説明も聞くことができました。

縄文人のお墓の形は、貝塚だけでなく、丸型ボウルの形をした周堤墓(共同墓地)としても現れます。千歳地域のキウス周堤墓群が代表的であり、そこは最初発見された時、アイヌ民族のチャシ(砦、祭りの場、見張り台など、機能については諸説あり)の跡だと考えられていたそうです。この形は、中心部で掘り出した土が外側に積もって、円の中心部と土手に高さの差が生じたもので、その深さが5mくらいに至る大型墓地もあります。このような形の周堤墓は、道内でも石狩地方を基準に、東の地域でしか見られない限定的な墓地遺構だと言われます。

縄文人の手先の器用さ

約12,000年にわたる縄文時代は6つの時期に分類されており、縄文土器も時代ごとに形や模様が変わります。北東北(青森、秋田、岩手)地域と道南地方は離れているにもかかわらず、製作された土器の形に時代的類似性が表れています。縄文早期の土器は、底がとがった形で形も粗末でしたが、長い時代を経て次第に繊細になっていくだけでなく、壺形の形に進化していくことがわかります。その形も様々で、魔法のランプ形の土器、鹿の文様が刻まれた土器など、縄文人の美的感覚が伝わる遺物も存在します。縄文土器は韓国の新石器遺物である「櫛目文土器」にも似ています。

縄文時代に作られた土偶も、現在に至るまでかなりの数が発見されています。ジャガイモ畑で偶然見つけられた中空土偶は、北海道唯一の国宝に指定されており、「カックウ」という愛称で呼ばれます。人間の形をした土偶は、毀損された状態で発掘されることが多いため、縄文人たちが健康を祈る呪術的儀式を行う際に土偶の一部を壊したと推定されます。函館市縄文文化交流センターでは、これらに関する様々な遺物が展示されていました。



▲櫛目文土器
(ソウル岩寺洞遺跡)



▲中空土偶とキャラクター「カックウ」



▲縄文早期の土器



▲右下に鹿が刻まれた土器



▲縄文土器の変遷史

縄文遺跡と示唆点



▲垣ノ島遺跡の竪穴住居跡
(函館市)
普通の公園にも見えます。

今回見学に行ってきた北海道の縄文遺跡はほとんどが人通りの少ない町にあったので、アクセスが難しい場合もありました。しかも、現在は縄文遺跡を観光資源として利用するより、ありのまま保全することに重点を置いているため、一部の遺跡では現場の専門家による詳しい説明がなければ、一般人には単なる丘や窪みにしか見えないような場所もありました。

大切な世界遺産とともに現代社会を生きていかなければならない我々にとって、日本の世界遺産保存政策は示唆するところが大きいと思われます。しかし、「宝の持ち腐れ」ということわざのように、保存という課題とともにより多くの人たちに遺跡の価値が伝わるよう積極的な広報や環境整備を行う必要もあると思いました。

開港地 函館

日本の開港地の一つである函館には、西洋の影響を受けて建てられた異国的の建物はもちろん、日本の伝統様式と西洋の建築様式が融合された建物も見られます。

函館は「世界三代夜景」が見られる地域としても有名であり、春になると星形の要塞「五稜郭」で花見を楽しむ観光客で賑わいます。五稜郭の中心部には江戸幕府の末期に蝦夷地(昔の北海道の地名)を管理する官庁として使われた「函館奉行所」があります。

※ 札幌と函館をつなぐ新幹線は2030年に開通予定です。



▲花見の名所としても人気の函館五稜郭

北海道の道の駅

道の駅は、道路利用者の憩いの場でありながら、地域の文化、歴史などの情報も提供する施設です。地元の野菜・果物や加工品なども販売しており、地域活性化にも寄与しています。

施設名
主な特産品
地域または施設の特徴

火山展望ができる資料室

千歳川でサケを捕獲している様子

そうべつ情報館アイ
りんご、とうきびなど
有珠山が見える道の駅

地域の特産物がわかる！

あふた
白菜、地ビールなど
英国船の上陸地

サーモンパーク千歳
サケなど
秋には捕獲風景も見られる

八雲町丘の駅
帆立加工品など
パノラマパーク

だて歴史の村
お米、わかさぎなど
大きな公園もある

わかさぎと助宗鱈

取材期間中に訪問した縄文遺跡群の近隣に位置する休憩施設の情報です。道内には計129の道の駅があります。

「北海道開拓の村」と「北海道博物館」

「北海道開拓の村」は北海道の開拓期の歴史に関する施設です。ここの正門は、かつて存在した札幌駅を縮小して再現したもので、正門を通ると馬車鉄道が走る風景が広がり、当時の町や農村などの雰囲気を感じることができます。入口付近には明治初期に建てていた「開拓使札幌本庁舎」を再現した建物があります。(個人的には、この建物が「赤れんが庁舎」に似ているような気がしましたが、二つの建物の建築様式は全然違うそうです。)再建された建物の中では塗料が使われているものもあり、当時、海外の塗料を輸入していたことがわかります。また、敷地内の建物の中を覗いてみると、マネキンや道具が置かれており、生活様式も把握することもできます。



北海道開拓の村(上段) / 北海道博物館(下段)

「北海道博物館」では、およそ120万年前からの北海道の長い歩みを見ることができます。そして、北海道の自然や文化も総合的に紹介されているので、展示物を通して短い時間に北海道を知るのに良い場所だと思いました。私はその中でも、マンモスゾウの化石や北海道独自の続縄文文化及びオホーツク文化を紹介しているコーナー、北海道の地名と暮らしなどが描かれている江戸時代の手作りすごろくが興味深かったです。また、アイヌ民族に関するコーナーでは、ストーリーテリング展示を通じて、アイヌ民族は今の時代をともに生きている人たちという親しみを感じさせます。



✓ 赤れんが通信
バックナンバーは
こちら



✓ 北海道庁
国際課
FACEBOOK



✓ 編集者・発行先 総合政策部 国際局 国際課
北海道札幌市中央区北3条西6丁目
TEL : +81-11-231-4111 FAX : +81-11-232-4303